

二 教員を目指して

進学希望達
成に努力

進学希望を実現するには、まず学資を作ること、そして家の者の了解を得ることが先決であると考
えた。

幸いに、ちょうどそのころ、我が村にある三島医院の薬局に人が要するということを聞いたので、そこへ頼んで入れ
てもらい学資を作ろうと決心をした。それにはまず家の者の承諾を得ねばならぬ。おどおどしながらも勇気を出して、

義姉に三島医院で働くことだけを、まず第一段階として申し出て嘆願した。それは何とか聞き入れてもらった。さつそく、三島医院へ一人で行って実情を話してお願ひしたところ、快く受け入れてもらえた。

ここで住み込みで一年間忠実に働いた。先生にも、奥様にも可愛がっていた。そして私の将来への希望も理解して下さっていたから、報酬も身に余るものをいただいた。今でも私は節約する方であるが、このときの一年は特に節約をした。草履は竹の皮で作って履く、下駄の鼻緒を作ることはもちろん、下駄のはまを入れて履くなど、四ツ身仕立の着物と羽織の二枚を合わせて本裁物に仕立直して着るとか、娘であつても衣類や持ち物に対して新しい物、流行的な物などにあこがれたり心を奪われたりすることは全然なく、仕事に専念するとともに自分の勉強にも精出した。一年間の報酬が六十円(月五円)、辞めるときはよく働いてくれたといわれて十円と反物を一反いただいた。私の小遣いは月に五十銭もいらなかつた。それも三人の実姉が時折り色々な品物やお金をくれていたので、報酬にはいっさい手をつけなかつた。

かねての願望である進学に、この七十円を元に出発しようと決意し、その旨を第二段階として義姉に願つたが、今度はなかなか了承は得にくくて困つた。常石中で女の子が女学校まで行つた人は、宝田院のお嬢さんだけなどと色々言われたが、とにかく私は決心しているのだからその決心を翻すことはできない。快く了承を得られぬまま実行に移すことにした。

尋常小学校からすぐの進学ではないから、県立高等女学校の一年からでは年限からも、また学資の面からもうどうせ続かぬと思い、私立増川実科高等女学校に入ることを決意した。入学願書の手続など、いっさいを自分一人で運び、もちろん福山まで十六キロの道のりを徒歩で、依頼・出願・受験にと何回も往復したが、結局願望かなつて入学許可をいただいた。

入学まで、入寮手続きや、荷物作りと忙しいうちに、喜びと希望の日々を過ごしたことが昨日のような気がする。女学校に 進学・入寮といっても、袴を一着新調しただけで衣類・寝具・日用品等全然新調しなかった。寝具は 入 学 亡母の形見の蒲団を平常着ていたのを縫い替えて持参した。他の物は平素から心がけていたので、別に新調しなくても不自由なことはなかった。

入学の五日前に荷物は尾道まで巡航船で、尾道から汽車送りとして、自分はまた徒歩で福山に出向いたのであるが、家を出るとき、佛前に額突ぬかき、亡父母に進学の報告を兼ね、目的達成を願って出発した。

入学式は大半が父兄同伴であった。自分は一人でも、淋しいとも、また他人が羨ましいとも思わなかった。それは何時の場合でも、また何をするにも一人でやっていたからであろう。

増川ヒサ校長先生の、凛々しい態度で厳しい中に深い愛情のこもった御訓辞、一言一句、ひしひしと胸に刻み込んだ。「よし、やるぞ。」の決心が一段と強まった。

さて、いよいよ待望の学生生活を始めたのであるが、喜びと希望の毎日であった。寄宿舎は学校の校地内であって、校舎と続いた棟で、四間に七間、それに一間の廊下のついた畳の大広間に、端にはかなり大きな押入れのような室がついていた。三十八名の舎生の荷物は一括そこに納めるのである。学校へは廊下伝いに行ったり帰ったり、学校から帰るとその荷物の置き場所へ行つて着替えをして、その大広間で皆机を並べて勉強するのである。夜の自習時間が終わら、机を両側の廊下に出し、掃除して夜の会に入る。それが終わったら、物置き室から各々が蒲団を運び二列縦隊に床をとり頭を並べて休むのである。藤井さんという岡山県出身の増川校長先生と縁類の人と枕を並べて、隣り合つて仲良く寝たことがとてもなつかしい。

舎則は皆厳守していた。消灯後、勝手な行動やおしゃべりをする者は一人もいなかった。豆電球のほの暗い下で教

科書を開き、頁を繰る音にも気をつかいながら勉強したことも、試験時には夜明けに便所に入って勉強したこともあった。自分ながら強い精神力を保持していたことには自信がある。あのころも、また今もその精神力においてはちっとも変わらないが、ただ身体があゝのころよりほんのいささか衰えたようである。

寄宿舎の食事作りは生徒が輪番で行っていた。献立は、舎監の先生が生徒と一緒に作られていた。「教育即生活」の教育で、実地の良い勉強になった。

学校の正門の左側に売店があつたが、三好さんという夫婦の人がやっておられた。誠にお二人とも優しい親切な方であつた。今もその方たちの面影を覚えている。売店には学用品・日用品・間食のお菓子などがあつた。間食は水曜日と土曜日であつたが、ほとんど間食のお菓子など買って食べたことはなかつた。すべてにおいて節約に節約を重ねていたので、毎月の学資は六円か七円くらいであつた。

日本は今もそうであるが、一般的に私学といえれば公立校より程度が低い感が自他共にあるようで、当時もそれはたしかにはつきりしていた。福山には県立高女・門田高女・増川高女の三つの女子の学校があつた。増川も門田も、その中にいる生徒はお互いに我が校の方がという意識を強く持っていたようであるが、私は他の者より根本的に目的が異なっていたので——すなわち短い期間に学資を少くして学校を卒業しよう、勉強の内容はその人の心がけから深くも浅くも狭くもなるのだ——県女であろうが私立であろうが、いや日本全国のいずれの学校であつても同じことだ。決して劣りはしないという自負心を強く持っていたので、劣等感などつゆさらなかつた。

その代わり頑張り通した。卒業の年の冬休み前、感冒から急性肺炎を起こし、さらに運悪く肋膜炎うくそえんを併発して一時苦しんだが、卒業を控えて今病気に負けてなるものかと、元氣を出して養生に専念した。お蔭でこうした大病にしてはわずかな期間で治癒したので、めでたく卒業ができた。

教員検定 試験

女学校では教員資格は得られぬので、教員検定試験を受けることを在学中から気にかけていたが、その勉強の方までは学校の勉強に追われて手が廻らなかつたが、卒業後はもっぱらそれに打ち込んでやることにした。

しかし、ここにまた家庭とのいざこざがあつたりして、受験勉強だけの苦勞でなく、色々な困難があつた。

或るときは長姉の家に、或るときは次姉の家に、また或るときは四姉の家に身を寄せて勉強した。次姉の家では子供の守役をしながら、四姉の家では子供の守りや牛飼いをしながら、長姉の家では私より三歳年下が長男であつたので子守りなどはしなかつたが、農業の手伝いは時々していた。

こうした逆境の中での受験勉強であつた。勉強も独学でやるのだから、行き詰ることもたびたびあつた。最初の受験のときには草深の岡崎先生、能登原の寺岡先生に指導を請うていた。

受験のとき、村の氏神様にお詣りして水ごりを取って身を清め、百度を踏んで合格祈願をして、女学校卒業後二年目の秋、第一段階の教員検定試験を受けたが、お蔭で一発で合格した。姉たちも皆喜んでくれた。

母校の増川ヒサ校長先生にも報告に行った。先生もたいそう喜んで下さつた。先生は私の心情をよく知っていて下さつたので、「それならひとまず、うちの学校に来て、手伝いながら次の段階の勉強をなさい」との愛情のこもつた言葉を下さつたので、お願いをして帰つた。

そのころ、能登原の長姉の家にいたのである。長姉の家は貧乏で生活は決して楽ではなかつたが、義兄は理解のある誠の良い人で、自分の子供四人と同じように私を可愛がり面倒もよくみて下さつていた。私は前にも述べたように、生まれると長姉のふところを抱かれ、三歳まで育てられたので、その姉の家にいるのが私には一番安定感があつて、勉強もよく出来たのである。また長姉の家にいる間がいちばん長かつた。